

心豊かな世代が育つ

童話の里づくり 428

—シリーズ— あなたの人權・わたしの人權

「困った子は困っている子」

玖珠町人權公開講座受講生

私は、今年から働き始めた社会人です。

年6回の人権公開講座を受ける機会を頂き、様々な視点・分野の人権を学ぶことができました。

人權問題は、学生時代に週一から二回習う程度でした。

差別や偏見は良くない、一人ひとり肌の色や目の色など全て個性であり、尊重されるべきものだと思います。

人權の授業は、そのようなことを学ぶ場であるし、小学生のような幼い時期から学ぶべきものだと思います。

しかし、当時は「かわいそうな」と、どこか他人ごとで、自分には関係ない話だと思っていました。自分

が差別された訳でも、自分が変えることのできない部分でバカにされた訳でもないからです。

また、人の立場になって考えていたつもりでしたが、深く考えていなかったのかもしれない。

社会人となり、改めて人權の話を知ると、同じ話題でも全く違う感じ方をしている自分に気付きました。

とくに第2回の「子どものころ」子ども的人権を聞いたあとです。私は、子どもと関わる仕事をして

います。まだ、働いて数ヶ月ですが、私なりに困り感や悩みがあり、自分自身どうしたらよいかわからなくなっていました。

そんな時に『困った子は困っている子』という言葉に出会うことができました。

『困った子は困っている子』とは、大人はよく「困った子」とか「困ったやつ」とか言うけど、本当に困っているのは、大人ではなく、子ども

自身なのだという意味です。

指示しても自分のしたいことを優先してしまう子どもや、次にすべきことがわかっていのになかなか動かない子どもに、私は困っていました。自分の言葉かけや行動の示し方を間違えているのかと思う日々でした。

そんな中で、『困った子は困っている子』という言葉を知り、心の中に落ちてきました。

私が「困った」と感じている子どももわざと困らせようとしている訳ではなく、「自分が決めたことを最後まで通さない」と気が済まない

「夢中になると人の話が耳に入らない」「分かっていても自身を制御できない」などの子どもたちです。

むしろそんな自分をもてあまし、困っている子どもだったのです。

私がただ主観的に困ったと思っただけで、これまで、その子の立場になって考えたかを思い返すと少ない気がしてきました。

日々の関わりの中でつい、自分の考えているように行動してくれなかったら、「なぜ、この子はしなければならぬのに動かないのだろう」と苛立っていました。

一方的にこちらの計画・思いを押

し付けるのではなく、その子どもがどのように変わっていきけるのか、そのためには、どのような支援が必要なのかを子どもの立場で考えていく必要があると気付きました。

子ども主体で関わっていくことがいちばん大切だと感じました。

目の前の問題解決も大切ですが、少し長い目で将来どんな人になってほしいのかを考えると、自然と答えが出てくる気がしました。

この人權公開講座を通して、常に子どもを主体者だと考えることで、子どもに寄り添った関わりができると思えました。

この人權作文について、意見や感想、激励など、お寄せください。また、みなさんの投稿もお待ちしています。

わたしたちをとりまく様々な不合理や差別について気づいたことや感じたことを、二〇〇字程度にまとめてみましょう。住所、氏名、連絡先電話番号を記入して(匿名可)、玖珠町教育委員会社会教育課「あなたの人権・わたしの人權」までお届けください。

